① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)

山と博物館

第9巻 第5号　1964年5月25日　大町山岳博物館

夏山雑感

夏近かしとはいえ、北アの山々の頂きには残雪が白く輝やいている。

春山に夏山にとこのところ毎年登山熱は高まる一方である。山小屋もそれに対処するために新築や増改築に忙しい。

数年まえまでは木材一本にしても、みなボッカといわれる強力の背にたよったものであるが、ここ一・二年は木材はおろか、飲料水までヘリコプターによって運搬されたと聞いている。

時代が変わったといえばそれまでであるが荷上げがヘリコプターを使って行なわれるようになったと同じように、登山者も変ってきている。服装の変わったのは勿論だが、稜線でラジオからジャズをふりまきながら歩いているもの、チウインガムをクチャクチャかみながら登るもの、いろいろである。

高山植物をつみながら登ってきた一人に注意を与えたところ「アラ、ここのお花はつんではいけないの?」と聞きかえされたのには驚いた。

驚いたといえば、昨年の夏ある山小屋で泊った折、朝出発しようと部屋から出て行った一人が青い顔をして戻ってきて小屋番に聞いている、「自分のキャラバンシューズがない」というのである。そして一時間、全部の登山者が出発したあとには、かわりのキャラバンシューズも残っていなかった。彼は小屋からもらったワラゾウリをはき計画を中断して山を下って行った。穂高などではピッケルがなくなったという話しも聞いている。

変ったものである。

(千葉彬司)

八ケ岳のヤチネズミ

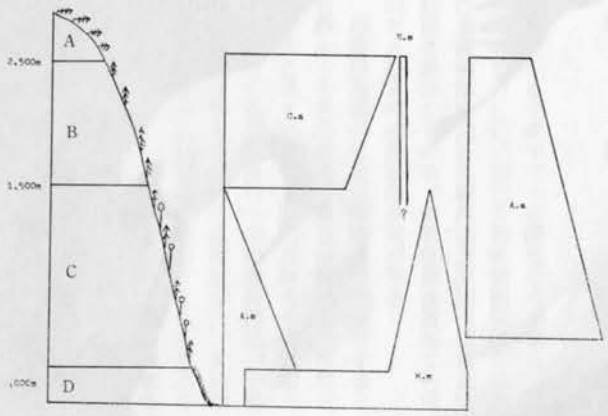
宮尾嶽雄

ヤチネズミ属（clethrionomys）はユーラシア大陸の北部森林帯に広く分布しており、本州へはシベリヤ大陸からサハリン、北海道を経て、津軽海峡によって北海道と本州が分離する以前に侵入したものと考えられる。現在、本州では東北地方から中部地方に至る山地にその分布が限られ、特に中部地方では亜高山帯および高山帯のみに棲んでいる。

『ヤチ』はアイヌ語で『葦などの生えた荒野』を意味する。体重は成体で三〇～四〇グラム。丸く大きい頭。小さい耳と眼。尾は体長の半分位。毛の色は背面が赤味の強いタイシャ色、腹側は茶ネズミ色。

ヤチネズミの分布が高山に限られていることから、その生活史や具体的な生活内容については、ほとんど知られていなかった。しかし、私たちはもう数年にわたって、八ケ岳でこのネズミの調査を続けており、分布や繁殖などが少しずつわかってきた。

八ケ岳は海抜千五百米から二千五百米位までが亜高山帯となり、コメツガ・オオシラビソの原生林が、いわゆる『くろふ』を形成している。二千五百米以上は高山帯となり、ハイマツが優占する。ヤチネズミは亜高山森林帯で最も優勢な種類であるが、ハイマツ帯にも分布を拡げている。ハジキワナを使って小哺乳類を採集すると、ヤチネズミのほかにヒメネズミ、スミスネズミ、ヒメヒミズ、トガリネズミなどが亜高山帯以上の処からとれ、低山帯ではアカネズミ、ヒメネズミ、ハタネズミ、ヒミズがとれる。そのほかに、カワネズミとミズラモグラの棲息も確認された。住家性のネズミであるドブネズミ、クマネズミハツカネズミは殆んどみられず、稀に山小屋などに入っても冬を越すことができずに死にたえるようである。



第一図　八ケ岳におけるネズミの垂直分布。
A高山帯（ハイマツ）。B亜高山帯（コメツガ・オオシラビソ）。C低山帯（シラカバ・カラマツ・コナラ）。D耕地・牧草地・原野。C・6ヤチネズミ。A・s アカネズミ。E・sスミスネズミ。A・2ヒメネズミ。M・aハタネズミ。

春から夏にかけて、ワナにかかるのはヒメネズミが多いが、秋から冬になると圧倒的にヤチネズミが多くなる。ヒメネズミは地下に食物を貯える習性があって、秋から冬にかけてはそれを食っているのでワナにかかりにくいのらしい。また、ワナにかかるのは雄が多い。このことから、ヤチネズミでは一般に雄の方が行動活潑で、雌は警戒心が強いのだと思われる。しかし、七・八月には雌が多くとれるようになる。この頃、ヤチネズミの繁殖は最盛期になるのだが、繁殖時には雌はワナを警戒することなく餌をあさるらしい。

姙娠している個体は四月から十月の間にみられるが、十一月から翌年の三月までは全然みられない。姙娠している雌の割合（姙娠率）は六月に最高となり、ヤチネズミの繁殖は年一回、六月を中心に行なわれる。一回に産む仔の数は平均三四強である。姙娠期間は二十日前後、哺乳期間も二十日前後らしい。乳頭は胸部に二対、ソケイ部に二対、合計八個である。

雄の精巣の大きさを調べてみると、四月～七月には長径が十ミリ位あるが、八月以後急激に縮小して冬には四ミリ位になってしまうしたがって、秋から冬にかけては精子形成は行なわれない。家の中に住んでいるドブネズミでは、精巣は一年中変化せず、年中繁殖が可能で、一回に産む仔の数も平均七四強である。環境条件と無関係に生理的状態を一定に保つことができる点、ドブネズミはヤチネズミなどより著しく生活面での進化段階が高い志賀高原（一、三〇〇～一、八〇〇米）においてさえ、ドブネズミは生理的恒常性を維持している。

春から夏にかけて産まれた仔は、大部分が性的には未成熟のまま冬を越す。雪どけ頃から急激に体重を増し繁殖活動に入る。しかし繁殖期を終えた十月頃には、殆んど全部が死んでしまうので、ヤチネズミの寿命は、野外ではほぼ一年位である。

ワナにかかったヤチネズミを解剖して胃の内容物を調べると、緑草が圧倒的に多く、そのほかには昆虫、漿果、樹皮などがみられる冬、雪の下では幼木の樹皮を多く食い、雪とけになると、白く皮をはがれた幼木が目立つようになる。このような木は、そのまま枯死してしまう。このような食性と関連して、大きな盲腸や一生のびつづける臼歯をもっている。盲腸では寄生細菌群の作用で、消化酵素では分解できない植物繊維が酸酵分解され、吸収されるのである。

日中は地中に作られたトンネル内にかくれており、夕刻から夜にかけて活動する。しかし、曇った暗い日や、林床被度の高い処では昼間も活動する。冬季には山小屋にも侵入して食物を食い荒すことがある。

本州のヤチネズミ（Clethrionomys anderson）の仲間としては、北海道にエゾヤチネズミ（C.rufocanus bedfordiae）、ユーラシヤ大陸北部森林帯にタイリクヤチネズミ（C. rufocanus）、ヨーロッパヤチネズミ（C.glareolus）、北アメリカに北アメリカヤチネズミ（C.gapperi）がいる。

本州のヤチネズミについては、更に細分して、トウホクヤチネズミ（C. andersoni）、ニイガタヤチネズミ（C. niigatae）、イマイズミヤチネズミ（C. imaizumi）の三種を認める人もあるが（今泉、一九六〇、Jameson, 1960）、私は現在のところ、そのような細分は妥当でないと考えている。

（信州大学医学部解剖学教室）

ギャチュンカン

高所キャンプとアクシデント

武田 武

高所の生活

残された世界の巨峰ギャチュンカンも、長野県山岳連盟隊によって四月十日登頂されました。

ふりかえってみるに二月十七日カトマンズを出発してよりネパール風邪になやまされたキャラバン。三月十一日ベースキャンプを建設してから登頂までの一カ月間は、息をつく間もないくらい苦しい毎日でした。

隊長をはじめ隊員、シェルパの努力は超人的なものがありました。

ベースキャンプから前進キャンプ、一、二、三、四五、六はゴジュンパ大氷河がよこたわり、各テント間には垂直なアイスフォール帯、クレバスの連続で使用したフィックスロープも三五〇〇メートルで、これは世界のヒマラヤ登攀史でも類がないくらいです。

七五〇〇メートルの第五キャンプ設営の夜などはテントが雪崩にみまわれポールを折られて、夜半に命からがら六六五〇の第四キャンプまで逃げ帰り翌日あらためて建設にとりかかるということもありました。

第五キャンプ以上になるとシェルパも高度の影響を受ける者が多く、故障者が続出して高所での労働にたえるシェルパの数も少なくなり、それに加えて第五キャンプで使用法が悪くガスターボンベの爆発事故があったりで七五〇〇メートル以上の高所では人間正常だと思い行なっていることが、まるっきり正反対のようなことをしている。

凍傷をおこしたシェルパも二、三人いた。シェルパの故障が続出したなかで隊員は快調なペースで第六キャンプ（七六七〇メートル）を建設した。

七〇〇〇メートルを越えた高所キャンプでは特に夜の睡眠時に呼吸困難を覚える。フランス製の酸素を吸いながらの睡眠もマスクが凍ったり、ヌレたりで余り具合はよくない。動作もかんまんになり、何か小さな一動作がすむと大きく深呼吸しなければならないそんな中で特に苦痛に感するのは夜半の用便である。

ナイロンの二重のテントの一歩外は零下三十度以下、そして二、三分の用便で外から帰ってシュラフ・ザックの中に入ろうとするとチャックが吐いた息でカチカチに凍りついて動かなくなったりしている。高所の生活は用便ひとつにしても楽ではない。

アクシデント

四月九日　最終キャンプから、大滝隊員、小林カメラマン、それにリーダーの私の三人が第一次頂上アタック隊として頂上に向った

チベット側の氷と岩のむずかしい壁を突破し、ネパール国境稜線へでた。そして頂上まで残すところ二〇〇メートルの地点に立ったちょうど昼食の時間だったので、そこの場所で休憩した。大滝隊員が昼食の用意をする間私はこれから先のルートを氷河にとるか、あるいは岩ルートにするかの偵察に一〇〇メートルほどトラバースして進み、氷河ルートの偵察を終り引き返そうと後を見た。その時に大滝隊員が氷河をチベット側へすべり落ちて行くのを目撃した。

その場所は休憩地点から二〇〇メートル程の所で、それよりさらに一〇〇メートルほど滑落し、それに連なる一五〇〇メートルのケンスイ氷河へと姿を消して行った。

あとにはミウン缶手袋、ピッケル、たばこ、ヘッドランプ、アイゼン、オーバーシューズをつけたままの高所靴の片方が滑落した後のコースに順に残っていた。

実際に落ちる瞬間を目撃した者が一人もいない（小林カメラマンは取材のため遅れていた）ので正確なことはわからないが、残った隊員の総合した意見では、休憩中に靴下のはきかえをしようとしてバランスを失なってすべったのではないかと、特にすべりやすいナイロンの羽毛入り高所服を上下に着ていた、加えて七七〇〇メートルという多分に高所の影響も受けていたのではないか……。

氷河の傾斜はすべりはじめた六十メートル位は少し急で、あとはやゝ急で、最後の一〇〇メートルは雪原のようなすべり落ちる最少限の傾斜であった。

この二個所を何んの抵抗もなくすべり落ちて行ったのは、すべり初めたときに仮死状態になってしまったのではないかと考えられます。全部を総合してみても、最悪のアクシデントの起こる場所とは思えない所でした。

長い苦労を共にしてき、頂上をあと二〇〇メートルに残してヒマラヤの大氷河の中に消えて行った岳友、大滝隊員の胸中を思うとざんきに耐えません。

謹しんでめいふくを祈ります。

（山博協議会委員・大町山の会）

ベースキャンプの武田隊員

スケッチ

小鳥の声をきく会

小鳥の声をきく会は山菜とりをかねて5月24日佐野坂一帯で行なわれた。

博物館・公民館・市役所労政の三者共催のこの行事に一般市民約五〇名が午前4時30分の貸切バスで青木湖の下車地点につく頃には、小鳥の声が林の中を流れていた。小鳥の声をきくのは午前九時で終り、後はハイキング班・ワラビ取り班に別れ午后4時まで楽しくすごした。

黒部の開放を迎えて

古川　潔

科学技術分野でのすぐれた業績が認められ三八年一月一六日、朝日賞（文化部門）を受賞したほど、黒部川第四発電所建設の技術は高く評価されている。特に日本の屋根である北アルプスをくりぬいた技術は会社の生命をかけただけあって完成には驚きの声のみ。

この関電トンネルが国立公園利用のために公開されることは大町市は勿論、国も期待する処で利用者の殺倒は明らかである。厚生省はこれを予測して富山県側では御前沢、本県側は扇沢の二ケ所を集団施設地区に指定した大町市はこれに備えて葛温泉の引湯、犬の窪地籍へ観光ホテルの建設、国鉄は信濃大町駅構内の拡充整備、島内駅の交換設備など四千万円を投じて着々受け入れ態勢を整えている地元市商工観光課、観光協会、交通業者、関電産業など関係者が本年にはいって数回会議をもって受け入れについて協議を重ねた。関電側はそのつど開放時期の明言を避けている

七月以降に開放するとは、関電側がダム完工式前後から公称したものである。『本年は工事中でダムの見学はできないが、明年七月一日以降は自由に見ていただける』

地元ではこの言葉を信用した。関電もまた本年の七月一日を目標にトンネル内のトロリーバス、ターミナル、ダム周辺の休憩所など計画を進めてきた、伝える処によれば、ダムの名称についても『黒部湖』『立山湖』で争われ、また字奈月では大町に同様、関電が開放に必要な工事を行ない、同時開放を強く要望している。従って一日開放は今の場合、絶望であるらしい。国立公園の景観保護ならびに公園利用に関して関西電力が国へ厳重な誓約書を提出している。開放時期は遅れても黒四ダムの公開は既定の事実である。

秘境黒部渓谷も僅か数時間で到達できる、このルート利用者は国鉄の推定では、本年三十万人と見ている。大町市の観光も本質的にかわってくる。同渓谷一帯の公園施設、公園管理の面は厚生省がさらに留意され、大自然の美しさを一人でも多く味わってもらうよう望みたい。

（観光協会専務理事）

針ノ木岳より黒部ダム

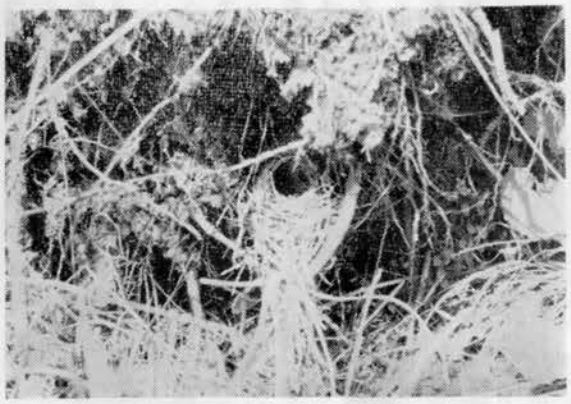
ホホジロの巣

長沢修介

5月という月は何処へ行っても小鳥達の歌声で一ぱいである。

夏鳥も皆帰って来て巣を作り始め、留鳥や漂鳥はもう卵が産み込まれ、早い者はヒナがかえってそのエサ運びに忙がしい。その忙がしいほんのちょっとの間でも自分の生命の讃歌を胸を張って大声で歌っている。

カラマツのやわらかな黄緑の芽吹き越しにそんな小鳥達を眺めていたら、2羽のホホジロが何かくわえながら時々同じ所へ下りる。巣を作っているだろうとそっと近寄ってみるともうほとんど完成に近い巣があった。ホホジロは落木に巣を作るのが多いがこの巣は木が倒れて窪地となった土手を利用して作ってあった。無事産卵、育雛ができることを祈りつつそっと側を離れた。



博物館ニュース

39年度博物館協議会委員決まる

氏名	所属団体名
大畑正己	常盤小学校
平林武夫	第二中学校
森田久子	市連婦
遠藤隆王	市連青
阿部酉与	市文化協会
横川豊	山岳会
田中保平	友の会
薄井脩助	市議会議員
広川光栄	〃
伊藤貞雄	〃
広瀬英吉	〃
高橋勇次	〃
荒山幸久	〃
古原和美	大町保健所
首藤豊	大町営林署長
山本携拳	大町市商工青年研究会
奥原一登	前協議会委員
宮田清	市商工会議所会頭
峯村嵩	大町市公民館長
内山慎三	

表紙説明

五月十三日フ化した本館海ノロ水禽園のコブハクチョウのヒナ

撮影　海川　庄一

山と博物館　第九巻　第五号
一九六四年五月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）二二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市上仲町
信州印刷大町工場